陽の山の今昔

江見水蔭

伊勢の陽の山へ二度行く機會が來た。それが四十二年目であるといふ事が、私の遊志を發どう起したかも知れぬかな。――本年五月十二日の夜。

明治二十一年八月十一日、私は未だ學生ではあるが、既に雑誌へ小説を寄せてゐた。文壇は混沌としてゐて、硯友社ぶりが世間から認められてゐるかな。

自分が何処までも伸びて行くか、全然見當は附いてゐるかな。未知數の青年文士で、大意氣で實に天を衝くと言ふべきの時、初めて陽の山に登るのであるな。

その四十二年後の今夜。惨敗地に塗れて、わづかに餘技に露命を繋いでゐる。陽の山は向こう水蔭文壇生活史の最初のページを飾るものが、今や最後のページを讀まるる行く。然るに筆が鈍くなるな。

その辯、同行者は、松崎天民、田中貞太郎、

畑耕一の三氏の他に、案内役の福山、水谷二氏
さへ加はつて、一台のタクシーは満員。今夜の四
日市の講演の疲れを喜び、同行あるべかりし
吉井勇氏の不参を[illegible]ぶつて、賑々しく行
進ではあつたのだが、自分は四十二年前の歴
史を、徒歩で四日市駅の山を向つた時の
記憶、それを喚起する為である。
誘るほどの事でもないが、自分は下らない
小事件を就ての記憶が、微細に、永久に、確保され
る性質で、暗中を高速度で疾走する間もず、

昔の日蝕を向ぶに乗る車夫の顔までが、思ひ出されるのである。
この夏草の茂が、草の葉が、塵を揉つて眼に見えてゐる。
それを搗いでゐた親の酒を注いでゐた。
その草の葉すでに歴々と見えゐる様な氣すら
した。
闇の中を
じが、菰野町を過ぎてからは、ヘッドライト
を照らす前途の一部々々。皆自分の記憶を
導反するもの[illegible]。
あの深い松林の間を、細い徒が縫つ
てゐた。それが畫きなほされ、清[illegible]が
俺が搖けて
ゐた。それを徒歩すると、もう樹蔭の
擁護から見放されて、照りつける原野の真

A 10 20 青山 三河屋紙店製

告白過

登りる。けれども名を「繪野」と呼び、
萩、桔梗、女郎花などが繁って居て、昔樽井也有が行脚
した、古路のすゝびと思ふと、非常に可慕し
く思はれるのであるが。
それが行かれずに行って「繪野」らしいのを
通るのである。本は繁り、家もバラ〳〵まあ
り、全然別の処へ連れて行かれる感じがした。
それは新道が出来たので、を之って、既に二
三十年前の事だといふ。
今度は一之橋畔の雪雪軒に泊った。先年は
ズッと上の三丘寺といふのに、従兄が避暑し
てゐるので、そこに数日同居したのである。
翌朝、その寺を訪ねたが、建築が変ってゐる。此所から
の眺望の佳さを遮断して、下にモダン式大浴
場の屋根が横ってゐる。わづかに鐘楼が
のみ古色が見出される。
其昔、この寺の方向側の下に、是空庵といふ小庵を構へて、
一女性が閑居してゐた。二十五六歳の、色は
浅黒かったが、イキな美人であった。
男嫌ひで、あゝして獨身で暮らしてゐるう

び山と徒兄は説明した。

この女性は寺へ帰る来るすで、一言位は語り交へた。その

程度の男さかつた。如何なる人の世を拗ね

れるか、其時は皆目分らなかつた。

後年、その女性は歌人であつて、宮中に召

出されたと聞いた。又の噂は、あれこそ露

伴の[illegible]の女人公だらう傳へられた。

（その当時露伴君は紅葉[illegible]代筆は度々他から[illegible]問は

れたが、全然知らぬと答へられた）

今度来て見ると、庵の跡は草が生えてゐ

No.

た。併しその女性の歌碑が一之橋畔に建立さ

れてゐた。

金木小冊（きふぬ）ふ名で有つたのを初めて知つ

た。陸軍[illegible]の時[illegible]大正十二年（六十六歳で）迄去さ

れれの8分つた。

刀自の歌集8、最近に特志家の手で出版され

た。そこに自分は詩で詩を詠つた。歌の如何は門

外漢の我々には分らぬ

疑問のくつて時々思ひ出されるのが、その刀自の若き（きたる）影を知

り、四十二年後に、輪廓が鮮明に知れて、

内面の悩みまでも

その[illegible]の歌

その由縁の[illegible]せるを詠む。感じ

A 10 20 青山 三河屋紙店製

方が鋭くいつて。接

[illegible]は[illegible]が[illegible]

鋭く想像された。

刀自の晩年は非常な淋しかつたらしい。

そもそも刀自の為る淡いてゐますか。自分の身

はつまさきもその侯か。淡声か。雨声か。そんす

らあ[illegible]

[illegible]

A 10 20 青山 三河屋紙店製